

後宮の香死妃は 香りに埋もれて謎を解く

液体猫 Ekitaineko



アルファポリス文庫

ある夜のこと。天欄國^{てんらんこく}に住む一人の侍女が亡くなった。死因は不明。殺されたのか、自ら命を絶ったのか。それすら解明されないまま、ときは過ぎていった――

第一章 後宮の出会い

「――ここが、噂の殿け？」

人の世が闇にまみれ、悪しき氣を一点に集めた後宮。その門前に一人の少女――香麗然^{コウレイラン}――が立っていた。

格好はみすぼらしく、大きな布を顔や体に巻きつけている。薄汚れた風呂敷包みを背負い、小柄な体を一生懸命動かし、先を急いでいた。お世辞にも清潔とは言えないような身なりだ。布の隙間から覗く前髪は長く、見え隠れする瞳はおどおどしている。それでも頑張つて門番に話しかけた。

「あのおー。おら、選妃^{せんひ}試験受けに来たんだけども……どこさ行けばいいんだっ

「へ？」

誰りが酷く、門番たちは怪訝な顔になる。顔をしかめて、しっしつと香麗然を追いかうような仕草をした。

「追い払うってことは、違うってことだべ？ 参っただ……おら、ここしか場所知らないだよ」

はあーと深いため息をつく。背中を丸め、風呂敷包みを背負ってトボトボと歩いた。
直後――

「わっぷ!?」

前を見ていなかったせいで何かにぶつかってしまふ。痛む鼻を押さえて、その何かを確認した。すると……

「この！ 無礼者！」

「……っ!?」

男たちにより、香麗然はその場で拘束され、地面に押さえつけられた。

（え？ な、何だっぺ!?）

ふりほどこうにも、相手は鍛え上げられた肉体を持つ頑強な兵たちだ。香麗然の細い体では、到底、敵うような相手ではない。

（ぶつかっただけでこれだけか!?）

見上げた先にいるのは身綺麗な侍女たち。白い華服に身を包み、うつすらとした化粧の中に美しさを秘めていた。どの侍女も文句なしの美女だ。

そして彼女たちに囲まれるようにして、一人の少女が馬車の中から顔を出していた。（うわっ。化粧、ごいなあ。あれじゃあ、肌を傷つけちゃうよ。それに似合ってねえし）

年の頃十二歳ほど、幼い顔立ちの少女だったが、化粧はお世辞にも上手だとは言えない。頬には白粉^{おしろい}がべったり塗られ、口紅にいたっては、たらこ唇のようになっていた。いわゆる厚化粧^{おしろい}というやつだ。

少女が何かを言おうと口を開いたが、侍女たちに睨^{にら}まれてしまふ。少女は押し黙るしかなく、顔を伏せてしまった。肩を震わせ、嗚咽^{おうえん}を堪えながら啜^{すす}り泣く。

（……ああ、多分これって……）

侍女たちによる、少女への陰湿ないじめ。

案の定、少女が侍女たちに何か言おうとすると、皆が無視をした。

そして、馬車は何もなかったかのように後宮へと入っていった。

それを見送りながら香麗然は起き上がり、埃^{ほこり}をはたく。風呂敷包みを背負い直して嘆息した。

（お母さんの言ってたどおりだ。後宮は薄汚ねえ。相手が妃^きだっぺど、容赦なく欲望

の贅^{にえ}になる」

門にいる兵たちが彼女たちを見送っている隙に、香麗然は少し離れたところへと向かった。そこには後宮を囲う高い塀がある。無限に続くような錯覚すら生まれるほど、横に長い塀だ。

塀の前で風呂敷包みを地面に降ろす。そして包みを開き、紫藤^{かんじ}の簪を取り出した。手に取るやいなや、髪を一まとめにして簪を挿す。それから風呂敷包みを背負い直し、キョロキョロと何かを探した。

「……あつ、あの木なんかちょうどいいがな」

塀の上に届くほどの枝を持つ木を見つけ、軽々と登っていった。枝から枝へと飛び移る様は、まるで猿^{さる}のようだ。

『ちよつとおー。教えたとおりに、優雅に行きなさいよね?』

塀瓦に降り立ったとき、どこからともなく声が聞こえてきた。とても野太い声で、渋みがある。

「えー? だって、正面からだど無理なんだもの。それに……」

香麗然は謎の声を聞いても狼狽^{うろた}えない。むしろ慣れた様子で平然と謎の声と話す。カコカコと、瓦の上を歩くたびに鳴る微かな足音に気を配りながら、身を低くして進んだ。

『……それに、何?』

「さっきの女の子から、香死^{かし}の臭いがしたの」

『……っ!?』

謎の声は押し黙る。

香麗然は足をとめて、どうしたのと小首を傾げる。

『……………』

謎の声はこれ以上言葉を発することがなかった。

香麗然は肩をすくめ、歩みを再開させる。やがて、後宮の庭が見える場所にたどり着いた。そこには広大な園があり、園路があちこちに伸びていた。立派な鯉^{こい}が泳ぐ蓮池、朱の柱と入母屋造りの屋根の東屋^{あずまや}。そして本館へと続く道や、奇岩の石峰もある。他にもたくさん場所へと繋がっているようだ。

香麗然が物見遊山な気持ちのまま先へと進んだ瞬間――

「わっ!」

後方から小刀が飛んできた。ギリギリのところをそれを避け、近くにある木へと飛び移る。けれどそれは背負っていた風呂敷包みに命中し、中身がバラバラと落ちていった。

「あー! おらの大事な線香がー!」

訛りのある口調で叫ぶ。

拾い集めるために木から降りようとしたそのとき、喉元にキラリと光る刃物が突きつけられた。

「――貴殿は、何者か？」

香麗然の喉に突きつけられた刃物は、柄の部分に龍が彫られている剣だ。

剣の持ち主は年の頃十八歳ほどの若い兵で、眉間に皺を寄せている。

清潔感のある長い黒髪を頭の天辺で縛り、毛先が尻尾のように揺れていた。風の眉、切れ長の瞳と、非常に整った顔立ちの青年だ。

ほっそりとはしているが、腕や腰などにはしっかりと筋肉がついており、兵士用の革鎧がよく似合う体つきだ。

「答えよ！ 返答によつては侵入者と見なし、死刑に処すぞ」

「……死刑はちよつと」

へらりと笑う。

青年はその態度が気に食わなかったようだ。

「ならば、さつさと答えろ！」

声を荒らげ、刃物を持つ手にますます力を込めた。

「えつと……」

（何なの、この男。怒鳴れば思い通りになるけども？ そーたわけねえ）

この青年を殴り倒そうと、香麗然は拳に力を込めた。刹那――

『ちよつと、ヤバイわよ！ お線香から煙が出始めているわ！』

「……っ!？」

姿の见えない声にハツとした。青年から視線を外し、散らばった線香へと意識を向けた。地面に落ちた線香からわずかな煙がたちのぼっている。

それは青年にも見えたようで「なんだこれは、火事か？」と、小首を傾げている。

「火事の方がマシだね」

香麗然は素早く振り返り、青年の手を軽く叩いた。不意を突かれた彼の手から、剣が音をたてて地面に落ちた。

青年が香麗然を睨む。

「貴様！……っ!？」

「おらに剣向ける暇があるなら、さつさどお線香拾うべ！」

彼の腕を引っ張り、そばにある線香を指差す。

青年は地面を見た。そこには、火がついていないのに煙がたっている線香が転がっている。

それを見た瞬間、青年の両目には焦りの色が生まれた。

「……なっ!? ど、どういことだ!？」

「どうもこうもないっぺ。このお線香は特殊なんだべさ」

訛りのある口調のまま、線香を拾う。すると、煙が上がっていたはずの線香は一瞬で消えた。

香麗然は次々と線香を拾っていく。他の線香も同様に、煙は跡形もなく消え去っていた。

「……………」

青年を見れば、信じられないといった顔をしている。香麗然は膝をついて、散らばった線香を集めていった。

青年は申し訳なさそうにしながら、香麗然に言われたとおりに一緒にあって線香を拾った。

しばらくすると香麗然の両手には線香がこんもりと乗っていた。それを風呂敷包みの中へとしまい、再び背負う。

「……君は、いったい」

「ああ。おらは、怪しい者じゃないっぺ」

静けさの中、ふっとやさしい風が吹き、冬の訪れを知らせる山茶花さざんかが舞う。花びら

を手に取り、儂い美しさに「ふふ」と声を出して笑った。

池を見ると、翡翠色ひすいの池の水面に、萼色の睡蓮が浮いている。

暦の上ではもうすぐ冬。けれど妙に暖かいせいいか、季節外れの睡蓮が割いていた。

「季節間違えてない?」と言いながら、そつと顔を隠していた布を取る。

青年の目に映ったのは、大きな瞳を持つ色白の少女、香麗然。彼女は不思議な容貌をしていた。

髪は薄い灰金色で、瞳の色も黒とは言いがたいほど淡い。パツチリした大きな二重やスツと通った鼻すじの、整った顔立ちをしていた。

「——申し遅れました。私の名は香麗然、十五歳です。とある事情によって、選妃試験きんしを受けに参りました」

軽く拱手する。

先ほどまでの訛りのある口調は消えて、標準的かつ、丁寧な言葉使いになっていた。

「……………っ!? その髪は!? それに、その薄い目の色……」

青年は驚く。長いまつ毛を震わせながら、香麗然を見つめた。唇を噛みしめ、数歩だけ近づく。

「まさか……香一族の者か!？」

「えっ? まさか香家のことをご存じの方がいるなんて!？」

「……っ！ あ、いや……」

しまったといった様子で、青年は自身の口を隠した。

香麗然是彼に興味を持っていない。ふうんとだけ言って、また布を被って顔を隠した。

（変な人。何でこんなに挙動不審になってるんだべ？ 状況的には、おらの方が動揺する側なんだけどなあ）

そう考えつつ、ためらうことなく間近にある木へと飛び乗った。猿のようにひよいひよいと登る様に、青年は思わず口をあぐりと開ける。

だが香麗然是そんな青年の様子など気に留めることなく、そのまま堀瓦へと移った。「それじゃあお兄さん、私は選妃試験に行かなきゃだから、ここでさようならね」

「あっ！ 待て！」

青年の、低いけれどよく通る声を背に受けながら、香麗然是身軽に屋根を伝って進む。降り立ったのは、建物の中へと入るための扉の前だ。後ろから聞こえてくる青年の声を無視し、堂々と足を踏み入れた。

中に入ると、真っ先に目に飛び込んできたのは朱い柱だった。太く、頑丈だということがひと目でわかるほどの迫力がある。天井は高く、そこにはいくつもの提灯ちようちんが吊

るされていた。

「……はあ。大きいけども、豪華だっべ」

香麗然の目には見るものすべてが真新しく映る。

歩くと靴音がコツコツと響き、磨かれた大理石の床は鏡のように姿を映す。その様に感心しながら、人が集まっている場所を探した。

やがて鳳凰の絵が彫られている扉の前にたどり着く。そこには兵士がいて、たくさんの女性が並んでいた。

香麗然是最後尾にいる女性の肩を軽くつつき、何の列かを尋ねる。

「何って……試験の列に決まってるでしょ？」

女性はそっけなく答え、香麗然から視線を外した。そして話しかけるなという雰囲気醸し出しながら前を向く。

（そっか。ここが、選妃試験の会場の入り口なんだ……）

よーしと、気合いを入れるために両頬を叩いて、香麗然是列に並んだ。

しばらく並んで、ようやく香麗然の順番がやってきた。彼女は風呂敷包みの結び目をギュッと握り、緊張した面持ちになる。兵士たちに品定めされた後、筆を渡された。

「これは？」

「筆記試験に使う筆だ。墨などは机の上に置いてある。開始の銅鑼^{どら}が鳴るまでに筆記試験の準備をしなさい。それから、わかっていると思うが不正を働けば即、失格となる」

兵士の視線が香麗然を射貫いた。どうやら香麗然のみすぼらしい格好から、不正をすると考えたようだ。何度も「不正はするなよ？」と、警告してきた。

（不正？ そーだなの、しねえってーの！）

見た目だけで不正を働く者という認定などされてしまつては、たまつたものではない。

けれどここで騒ぎを起こせば、それこそ試験を受けることすらできなくなつてしまふだろう。

泣く泣く言葉を飲みこみ、人当たりのよさそうな笑顔を作つて「はい」と答えた。そのまま中へと進み、空いている席のひとつに座つた――

数時間後に試験は終わり、香麗然は園でのんびりしていた。ほーっと空を眺める。結果発表までは一週間かかるという。

「あーあ。選妃試験って、結局は文字の読み書きができつかどうがだったなあ。まあ、妃になる以上は、最低限それができねえと駄目なんだつべげど……」

建物と園を繋ぐ階段に座り、ため息をついた。

『そりゃあねえ。妃になるためには、そういった教育がされてるかどうかは確認する必要があるわよ。字が書けないうえに読めもしないなんて、貴族の連中には通用しないわよ？』

「……まあ、ね」

また聞こえてきた謎の声に、慣れた様子で受け答える。

謎の声の言うように、妃ともなれば読み書きは必須。貴族のさらに上の存在、皇帝の妻にもなる女だ。皇帝の恥とならないよう努めるのが当たり前であり、それが下の者への示しにもなる。

ただ今回の試験は日時と開催場所、それしか御触れがなかった。試験内容など知らない女たちは、一般人でも妃になると期待していたことだろう。

「それを、見事に裏切つてくれたわよね」

『……あんただつて、簡単に妃にはなれないって予想してたんじゃないの？』

「うん。そりゃそうだつて。一般人から妃に成り上がるのなんて、よっぽど稀な話だつて聞ぐしよ。誰彼構わず、女性だら参加できるつうう誼^{うた}い文句の時点で、怪しいとは思つてたわ」

『じゃあ、別に落ちこむことはないんじゃない？ あんたは、文字の読み書き以上の

ことができるんだし』

謎の声は野太い声で笑い飛ばした。

香麗然はムツとし、何もない空中を摘まむ。すると謎の声は『いひゃい！ 動物虐待よ！』と、声を荒らげた。

(……暇だっぺ。あつ、落っこちたお線香は、全部拾えたべさ?)

塀の方で線香の煙が上がつていないことを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。そして風呂敷包みを地面に置いてから広げた。

「香死は……うん。落ち着いているわね」

「ほう？ その線香は、そのような名前だったのか？」

「うん。死者の魂……やり残したごととか、伝えらんねえまんまの想いを視られるお線香なんだわ。選妃試験に合格すりゃ、もつと性能のい……い？ ……………のあー!!」

香麗然が聞かれたことに答えながら振り向くと、そこには先ほどの青年兵士がいた。興味津々に風呂敷を覗きこんでいる。

「な、何の用だっぺ!!」

「いや。君の姿が見えたから、何をしているのかと思ってな」

「へ、変質者だっぺ!!」

「……なぜ、そうなる？」

「お母さんが言っただのよ！ 女の秘密暴こうどする男は変質者だって！」

「極端すぎないかい？ ……まあ、いい。それよりも——」

青年は苦笑いしながら香麗然から離れ、腰にある剣を鞘から抜いた。笑顔を消し、剣の切っ先を香麗然へと向ける。

「君は、香一族の者だな？ なぜ、ここにいる？」

冗談も通じないといった様子だ。青年の整った風の眉にはシワがよっている。香麗然を香一族と言ひ、容赦のない眼差しで彼女を凝視した。

一方で、剣で脅されている香麗然はというと、へらりと笑っている。彼の真剣な話を水を差すように、のらりくらりと微笑んでみせた。

「ふーん。私が、その香一族だって知ってるのね？ でも、女の秘密を暴く男はモテないよ？」

「は？」

「……一応聞くけど、あなたは香一族のことを、どこまで知っているの？」

訛りも、直前までの呑気な態度も消え去る。代わりに現れたのは香麗然自身が持つ気位と、そして気品だった。

第二章 香一族

香麗然が生まれるより、遙か昔のことだ。ここ天欄國は、病魔に蝕まれていた。國民の半数が謎の病に倒れ、國は滅亡への道を歩み始めていた。

そんな折、どこからともなく一人の少女が現れた。少女は天欄國には見られない、薄い色の髪と瞳の持ち主だったという。少女は不思議な香を使い、病の原因を突き止めたと言われている。さらに、病気で死した者の無念を次々と解きほぐし、遺された者の気持ちを和らげたとも。

少女がどこから来て、なぜ、そのような不思議な香を持っていたのか。それは未だにわかっていない。

ただ、ときを経た今、その伝説の少女を祖とする香一族は、すでに忘れ去られた存在となっていた。その名は記憶からも、歴史の書からも消えている。

月のように淡い灰金色の髪色と、土にも似た色合いの瞳。それだけが、密やかに、ひっそりと語り継がれているだけだった。

「——文献に載っている香一族については、それだけ。ああ、それから、香を操ると

いうことも……」

自らを香一族と名乗った香麗然に、青年は怪訝な顔を向ける。

「それ自体が、人の業ではないと聞く」

「そりゃあ、そうでしょ？ 香を自在に操るなんて、どう考えてもおかしなことだもの。でも何で、そこまで知ってるの？」

「……………」

香麗然は平然とした様子で、青年からの返事を待った。けれど、待てども青年からの答えなどない。

青年を見れば、深刻そうに眉を歪めている。ぶつぶつと何かを呟きながら、空を仰ぎ見てはため息をついていた。

(……変な人)

今のうちに退散しよう。そう考え、風呂敷包みを背負い直した。けれど……

「ぐえっ!？」

風呂敷包みを後ろから引つ張られてしまう。一瞬だけ息が詰まり、目に涙が溜まった。

「ちょっ…何すんだっぺ!？」

「あ、いや……すまない」

青年はバツが悪そうに、申し訳なげな表情を浮かべている。視線を左右に泳がせ、言葉もしどろもどろだ。

「……ハッキリ言って。おらみたい田舎もんに、妃なんて似合わねえって」

香麗然は、諦めというより初めから期待をしていなかったとでも言いたげな目をした。それでも受けなければいけなかったのだと、ぼそつと呟く。

青年は大きく深呼吸をして姿勢をただし、丁寧な拱手する。

「試験を受ける権利は誰にでもある。もちろん、君にもだ。俺の態度が、君にそのような顔をさせてしまったのなら、謝罪しよう」

素直な言葉だった。

それが本心からなのか、それとも建前なのか、香麗然にはわからない。けれど青年の人柄は、闇があまねくこの地では、珍しく直球だった。

そんな青年の謝罪を、香麗然は一旦受け入れる。軽く首を振って、大丈夫だと微笑んだ。

「私も、ちょっと卑屈になってたから。私の方こそ、ごめんなさい。一人で知らない土地に来るのって、こんなにも心が疲れることだったなんて思わなくて……」

知り合いのいない地で、一人寂しく試験に挑んだ。そこで知り合った青年が再び声をかけてきてくれた。寂しさで少しだけ冷めていた心に、この青年がするりと入って

きた。それは香麗然の寂しさを埋めるのにはじゅうぶんすぎる声かけだった。照れながら、そう話す。

青年をジッと見つめ、ふふつと微笑んだ。

「……いや。俺の方こそ、簡単に女性に声をかけるなど、反省しなくてはならないな。それよりも、一つ聞きたいのだから……」

「うん？」

香麗然は風呂敷包みを解き、近くの階段に腰を下ろした。青年もそれにならい、彼女の横に座る。

「君は、選妃試験を受けたという話だったな？」

「え？……ああ、うん。そうだけど？」

それがどうかしたのかと、まん丸な瞳をさらに大きく見開いて、ズイツと距離を縮めるように、青年の顔を覗きこんだ。

青年は慌てて立ち上がる。その耳は真っ赤になっていた。

「……こほんっ！ 一応、言っておく。君が受けたのは、侍女試験だ。妃を選ぶための試験ではないぞ？」

「そんなこと知ってるわ。妃を……え……ら……ぶ……ん？ え？ じ、じよ？ 妃じゃなくて？」

青年の言葉を聞きながら、香麗然はわなわなと顔をひきつらせる。やがて真っ青になり、絶望しながらその場に四つん這いになった。

「う、嘘ー！ 侍女？ 妃じゃねえの!?」

「……………」

青年は落ちこむ香麗然の肩を慰めるようにそつと撫でた。苦笑いを浮かべて「ああ」とだけ答え、香麗然にかけるべき言葉を探している。

香麗然は風呂敷包みをギュッと抱きしめ、メソメソと泣いた。

「おがしいど思ったわ。選妃試験だというのに読み書きだけの試験なんて…………もつとしっかり調べておくべきだった」

「…………まずは、その謎の方言をやめてくれないか?」

「これは、おらのアンアンテンテンや。こればかりは、やめられねえ」

「ア…………ア、ン? ……なんだそれは。と、ともかく。妃を目指すのなら、その方言は直したほうがいい」

「え!? 駄目なんけ!?」

「当たり前だろ!?」

「直したくないっぺ」

香麗然は泣き、青年はギョツとした。

二人は同時に絶望し、どんよりした空気がその場を包んだ。

（う、嘘!? 故郷の言葉使っちゃ駄目!? そーたごと、考えだごとながつと）頭を抱える。何度のため息をついて百面相になった。

（そ、そもそも、妃じゃなくて侍女試験だった。これじゃあ、何の意味もねえ）

香一族としての最終的な目標から遠ざかってしまったと、自分を責める。

そのとき、青年が立ち上がった。

「まあ、そこまで落ちこむ必要はないだろう。侍女から妃になった事例もあるからな」

「え? そ、そうなの!?」

「ああ。侍女であっても歴史に残るような何かをすれば…………あるいは、皇帝の目にとまれば、なれないことはないぞ?」

「…………ふむふむ」

（前者は難しいかも。そうなると、皇帝の目にとまることをする? ……でも、どうやって? ……ん?）

ふと、風呂敷包みを見ると、少しだけ宙に浮いていた。

「は? はあ!? 風呂敷包みが浮いて…………」

青年は驚きのあまり腰にある剣に手をかけ、すぐさま鞘から抜こうとしたが…………

「……っ!? な、何だこれは!? 抜けない、だど!?」

ぐぬぬと、手に力をこめる。それでもびくともしなかった。まさかの出来事に気が動転したのか、足をもつれさせ、その場に尻もちをつく。そして呆然としたまま、動けずにいた。

香麗然は宙から風呂敷包みをもぎ取り、地面に置く。そして青年の剣の鞘へと手を伸ばした。

「もう! 遊ばないの! やきとり、それから、もち」

香麗然は謎の台詞を吐き、何かを叱るような目をした。それから鞘と風呂敷包みを交互にジツと見つめる。次の瞬間、微かに鳥の鳴き声が聞こえてきた。

やがて風呂敷包みと鞘の辺りが、うつすらと揺らめき始めた。それは次第に霧のように濃くなり、やがて雲のような姿から綿毛へと形を変えた。

瞬きするのも惜しいほどの不思議な光景は、あつという間に白いふたつのかたまりになる。

そして最後に、白くて丸っこい、二匹のかわいらしい鳥が姿を現した。真っ白い羽毛に覆われた体はまん丸で、饅頭まんじゅうのよう。つぶらな瞳と嘴くちばし、尾羽と足は黒かった。

小さくて、小首を傾げる様は小動物そのもの。目の前に現れたのは、実に愛らしい鳥だった。「ジュリリ」と、変わった鳴き声を園全体に木霊させ、香麗然と青年の周

囲をぐるぐると飛び回っていた。

「……な、何だ、この鳥は!?」

我に返った青年は飛び続ける鳥を一匹捕まえる。

首根っこを摘ままれた鳥はジタバタした。もう一匹が相方を助けようと、青年の手を嘴でつつく。

「いてっ! わかった、わかったから!」

さしもの屈強な青年ですら、嘴攻撃には痛みを覚えたようだ。捕まえていた鳥を放し、つつかれて赤くなった手の甲をさすった。

「ふふ。この子たちは、私たち一族の守り神よ」

「守り神? このような、小さな鳥がか? そもそも、このような鳥、見たことがないぞ?」

「……でしょうね。だってこの子たちは、本当にごく一部の地域にしか生息していないんだもの。多分、私たちが住んでいるこの大陸の中では、香一族が住む隠れ里にしかいないんじゃないかしら?」

香麗然たちが住む大陸はとても大きい。端から端まで行こうとすると、軽く見積もっても一ヶ月はかかると言われている。

「地理には詳しくないから、よく知らないけれど……大陸には、いくつかの国がある

んでしよう？　その中でも一番大きくて武力や影響力があるのが、ここ、天欄國よね？」

「……ああ。一番広大な土地を持ち、民の数も大陸一と言われているな」

「私の一族は、この大陸の隅っこ……天欄國の西にある山奥で暮らしているの」

香麗然は口笛で白い鳥たちを呼び戻す。鳥たちは素直に香麗然の手のひらに収まった。

「この子たちは、大陸の中ではその里にしかない。大陸の外どこかにもいるらしいけど、私はよく知らないわ」

もふとした羽毛を顔に近づけてくる鳥たちに、香麗然は嬉しそうに微笑む。そして一匹を頭の上に、もう一匹は手のひらに乗せた。

青年へと向き直り、手のひらに乗せている鳥を彼へと渡す。

「シマエナガっていう鳥なの」

「……かわいいな」

「でしょ!?　守り神だけれど、すっごくかわいいのよ！　あ、あなたの手のひらに乗ってるのもちよ。で、私の頭の上にいるのが、やきとり」

やきとりは胸をはった。もちの方は小首を傾げている。

「腹が鳴りそうな名前だな」

「やきとりは喋れるの。でも、私にしか声が聞こえないんだ。もちの方は喋れないけれど、頑張り屋さんよ」

「……………」

青年は二匹のシマエナガを見つめた。けれど、どちらもまったく同じ姿をしていて、見分けることができないようだった。

「……いや、わからんぞ！　どっちも同じじゃないか!？」

もつともな意見だとしても言うように、香麗然の頭の上にいるやきとりは何度も頷く。香麗然は頬を膨らませ、頭の上にいるやきとりのお腹をつつく。

「この子たちは、私が生まれるよりもずっと前……この大陸ができた頃から生きているらしいわ」

「……は？　シマエナガという鳥は、そんなに長生きなのか!？」

「さあ？　どうかしら。この子たち以外のシマエナガに出会ったことないし、お母さんたちも知らないらしいから」

青年が香麗然にもちを返す。もちは頭の上に乗るやいなや、やきとりと一緒にどこかに飛び去ってしまった。鳥の姿が見えなくなるまで、香麗然はシマエナガを目で追いつけた。

風が薄い灰金色の髪を揺らす。手で髪を押さえ、笑顔で青年へと送った。

「そういえばあなたの名前、聞いてなかったわよね？」

「ん？……ああ、そうだったな。俺は曹朱^{テウシュ}。しがない一般兵だ」

二人は握手を交わす。

(……ん？)

曹朱の手は男らしく骨太だ。ささくれた指だが、爪だけはとてもきれいに手入れされている。そのことに違和感を覚え、香麗然是ジツと曹朱を見つめた。

「……うつ！ な、何だ？」

「ううん。何でも……あつ！ そうだった！ ねえ。あなたに聞きたいことがあるの」

たじろぐ曹朱をよそに、背伸びして顔を近づける。曹朱が後退りしてもお構いなしに距離を縮めた。

訝^{いぶか}しげな表情をする曹朱の瞳を凝視し、うんうんと頷く。そして顔を離し、顎^{あご}に指を当てた。

「私、人を探しているの」

「は？ 人？ 誰を？」

「名前は知らないわ。一度、ちらりと見ただけだもの」

香麗然是首を左右にふる。おちゃらけた素振りを消し、神妙な面持ちで曹朱と向か

い合った。

「結構幼い妃……かなり厚化粧で、侍女たちが偉ぶってる感じ、と言えはわかる？」

(後宮の門のところで会った妃。あの子からは、死の香りがした……)

この事実を、どこまで話すべきか。そもそも、この青年を信用していいものか。香麗然是その判断に迷っていた。けれど探している妃の行方はおろか、名前すら知らない。そんな香麗然にとって、頼れる情報源は目の前の男しかいなかった。

知らない土地で動くということは、こうも不便なものなのか。香麗然是そのことを身をもって思い知る。

眼前にいる曹朱の答えを待ちながら、落ち着かず身を揺らす。すると……

「……………幼い妃……ああ。それはもしや、金明妃^{ジンミン}ではないか？」

「金明妃？」

「ああ。多分だがな。金明妃は、母親が庶民だったそうだ。それに、その母親も嫁ぐというよりは身売りだな。先帝が町で一目惚れし、金明妃を授かったと聞く。その後母親は死に、それを知った先帝が、彼女を引き取ったらしい。それがきっかけで、金明妃は先帝の娘ということで後宮入りしたと聞いた」

現帝と金明妃は異母兄妹にあたるという。先帝が亡くなった今、後宮にとどまる必要はなくなったが、その妹を突き放すことは、現帝にはできなかった。そんなことを

すれば、金明は行き場を完全に失ってしまうから。

その結果、現帝は妹のことを思い、妃の地位を授けたままにしていた。

ただ、この決断のせいで、心ない女たちの餌食になっているのも確かである。なぜ侍女たちが金明をいじめるのかという詳しい理由まではわからないけれど、現帝の誤った判断の結果ではないだろうか。

曹朱は冷めた声でそう話した。

「それってさ。今の皇帝の、中途半端な愛情にしか見えないわよね？」

香麗然是容赦なく真意を突いた。

曹朱はため息をつきながらそのとおりだなと呟き、建物を直視した。

「……まあ、どのみち、私じゃ何もできないだろうけど……あつ！」

香麗然是呟きながら、思いつく。

（ちよっと待って。金明の侍女になれば、私の目的も達成できるんじゃない？）

いじめられている原因は何だろうか。それから、金明から放たれた香死の気配。前者は好奇心からくるものだけど、後者は違う。

香麗然の当初の目的は妃になることだった。だけど、まずは妃の侍女になることで恩を売ることができるのかもしれない。

香麗然是風呂敷包みを背負い、曹朱の前に立った。

「ねえ！ 金明妃の侍女になれないかしら？」

「は？ ……ああ、いや。侍女試験に合格すれば、可能性はあるだろうが……って、おい。人の話を聞けよ」

どの妃のもとに配属されるのかは運次第というのが通例。一般兵の曹朱では、どうしようもない話だ。

しかし、香麗然是それを聞いて、はいそうですかで終わるような女ではない。転んでもただでは起きないとほまさに彼女のこと。にんまりと笑い、拳を握る。

「よーし！ 金明妃の侍女になれるよう、祈りを捧げるわよ！」

「は!？」

「ほら。曹朱も一緒に!」

「俺もやるのか!? なんで!？」

香麗然と曹朱は膝をつき、建物を拝む。香麗然是真剣に。曹朱は半ば投げやりに、苦笑いしながら。

二人の温度差がある声が園中に響くと同時に、正午を伝える鐘が鳴った。

第三章 侍女と妃

試験が終わってから結果が出るまで約一週間、香麗然は何をすればいいのかわからずにいた。後宮からほど近い場所にある受験者用の建物に寝泊まりしながら、暇な一日を過ごしていた。

「……うー。やることない」

薔薇の形に切り取られた飾り窓の縁に、両肘をつく。ぼーっと外を眺め、あくびをしながら再び景色を見つめる。

そんなことがもう二日も続き、彼女はついに爆発した。

「うがー！ もう、へずまんねえわ。何にも、やるごどねえんだもの。そういえば、同じ受験者の人だち何してるのがしら？」

無駄に暇を持て余すより、同じ志を持つ女性たちの生活を覗いてみよう。突拍子もない思いつきだったが、善は急げと線香を包んだ風呂敷を手にして、部屋を出た。そして思い立ったが吉日、だったけれど……

「……そうだった。誰が、どの部屋にいるのか。まったく、知らないんだったわ」

行き先もわからないまま調子こいて散歩などしようものなら、迷子になりかねない。ただでさえ知らない土地で、知り合いなどいない。そのような場所で迷子にでもなってしまったらと考えると、香麗然は項垂れるしかなかった。

（……だからと言って、何もしないのは性に合わないのよね。よし！）

シマエナガのやきとりともちを呼んで廊下を歩き始めた。

そのとき――

「――香麗然？ 君は、こんなところで何をしている？」

「……あつ！」

振り向いた先にいたのはあの美しい青年、曹朱だ。彼は最初に出会ったときに着ていた革鎧を脱いでいて、今は白い漢服のみになっている。長い黒髪を首の後ろで一纏めにしながら、香麗然へと近づいてきた。香麗然の前で立ち止まり、二匹の鳥をジッと見つめる。

「なあに？」

「いや。何でもない。それよりも、君はなぜここに？」

「んー……暇なのよね。結果が出るまで一週間ぐらいあるのよ。その間、何してようかなって、思ったの」

「……試験に参加した者たちは皆、結果が出るまでおとなしく部屋で待機していると

いうのに。君は本当に……」

曹朱の表情は和らぐ。同時に、呆れたようにため息をついた。

「そんなこと言ったって、私は私だもの。あつ、そうだ！　せつかなんだし、後宮を案内してよ」

「は？　いや。俺はこれから仕事……」

「ほら。早く！」

香麗然は曹朱の手を握る。それは無意識なのか。香麗然はただ、屈託のない笑顔で曹朱をぐいぐいと引っ張った。

「……はあー。仕方ないやつだ」

一瞬だけ。

香麗然がわからないくらいの一瞬、彼の両目は大きく見開かれた。そしてほんの少し、耳の先が赤い。

香麗然は、曹朱の胸の奥に芽生えた仄かな想いにまったく気づかなかった。

やがて後宮を囲う正門へと到着する。外壁は左右に長く、高さもある。見張りの兵士たちを横目に、二人は正門の前に立った。

「——ここには、殿と宮以外にも邸がある。邸は官僚たちの宿舎で、後宮の中心にあ

る園の手前にある」

正門をくぐると、道の両脇にいくつもの建物が並んでいた。それらは官僚たちの邸であり、多くの官僚たちは位ごとに分かれて暮らしている。

四夫人の住まう宮は、その邸が並ぶ通りを、さらに奥に進んだ先に構えられていた。殿を中心にして東西南北の四つの建物があり、四人の妃がそれぞれそこで暮らして

「君が受けた試験。あれに合格すれば、四夫人のうちの誰かの侍女として働くことになる。ただ、どの妃につくかは運次第だな」

「……ふーん」

香麗然は、どんなことにでも「なるようになれ」という樂觀主義者だった。そのせいなのか、はたまた単にこだわりがないだけなのか、主となる妃についてはさして気にしている様子を見せない。

（まあ、できることなら、金明妃の侍女がいいわね。あの香死の正体が知りたいし）案内をしている曹朱が歩き出し、香麗然はその背中を追いかける。

「ここには、皇帝の住居がある。俺たちが出会ったあの庭、あそこからさらに奥へ進むと、殿に出る」

「見学できたりするの？」

「いいや、さすがにそれは無理だ。皇帝自らの呼び出しでもない限りは、入ることは

できん。見学できるのは、殿の手前にある園までだ」

香麗然の興味は尽きない。両目をキラキラと輝かせ、そわそわしていたが、立ち入り禁止とわかるや否や、しょんぼりしてしまう。

そんなふうにコロコロと表情を変えながら、香麗然は園へと向かった。

「……あーあ。結局、ここに戻ってきちゃったわね」

後宮の中心にある園へと再び足を踏み入れた香麗然は、うーんと背伸びをする。隣に立つ曹朱に、案内ありがとうと笑顔で伝えた。

けれど曹朱の方はどこか物足りないようで、まだ遊び足りない子供のようになり、口を尖らせていた。

それに気づかない香麗然は曹朱の前を歩き、与えられた部屋へと戻ろうとする。けれど曹朱に腕を掴まれ、歩みを止められてしまった。

「ちよつと……何なのよ?」

「あ、いや。すまない。その……」

「……?」

曹朱はゴニョゴニョと口ごもりながら、視線を泳がせる。

香麗然は肩をすくめ、軽くため息をついた。

(言いたいことがあるなら、言えはいじやない)

はつきりしない曹朱の行動に、香麗然は困惑していた。どうしたのと、尋ねようと口を開きかけたそのとき――

園にある池の方から鋭い悲鳴が響いた。

二人は顔を見合わせると、弾かれたように悲鳴が聞こえた方へと駆け出した。

園にある池の周りに大勢の人々が集まっている。その人々をかき分け、香麗然たちは前に出た。

「いったい、何があった!?」

人だかりに声をかける。すると近くにいた兵が曹朱へと拱手して、騒ぎの中心となっている者を指差した。

そこにいたのは年端もいかぬ幼い少女――四夫人の一角、金明妃と、十五、六歳ほどの朱い侍女服を着た女性だった。顔を真っ青にして震える金明妃を背に庇い、女性が兵士に食ってかかっていた。

「今さら、ふざけないでよ!」

女性の朱い衣の袖はかなり汚れていた。すっかり濡れになっており、そばにある池に落ちたのだらうと推測できた。幼い金明妃を庇いながら、ものすごい勢いで兵

士の体を突き飛ばしていた。

「名字があつたとしても、金明が皇帝の妹であることにはかわりないでしょう!？」

ふー、ふーと、興奮しきつた様子で兵士に掴みかかった。

その様子を見ていた香麗然の瞳から光が消える。

(名字、か。この國の民には基本、名字なんてない。名字を持つ者は余所者か、貴族へ成り上がった者^{たぐひ}なのね)

天欄國は昔から、他國の者をあまり好ましく思っていない。世襲制を好み、他國の血が混ざること嫌う者が多いことが原因とも言われている。そして余所者が地位を手に入れることを、よしとしない。

(私も、香という名字を持っている以上、他人事ではないけど)
名字があるという理由だけで他國民扱いを受けることもある。

「……………」

香麗然は言葉を発することなく、成り行きを見守る。隣に立つ曹朱が心配そうな顔で、香麗然を見ていた。

「香麗然、すまない」

「ふふ。何で曹朱が謝るの?」

曹朱は申し訳なさそうに眉根を寄せている。

香麗然は曹朱の背中をバシバシと叩き、軽く笑い飛ばした。そして香麗然と曹朱は顔を見合わせ、少女たちのもとへと向かう。

「金明妃、いったい、何をなさっているのです?」

「あ……曹朱様……っ!?」

曹朱の名を呼ぶその声はとてもか細い。小さくて頼りない肩を震わせながら、大きな目に涙を溜めていた。

曹朱は少女に触れることなく、美しい顔に困惑の色を滲^{にじ}ませた。そして、香麗然へと視線を送る。

その意図を汲み取り、香麗然は軽く頷いて、そつと片方の膝をつく。そして見上げると、金明妃の両手を優しく握った。

本来であれば、香麗然のこの行為は、妃に対してとても無礼なものだった。だが不思議なことに、その場にいる誰一人として彼女を咎めようとはしない。それどころか、ヒソヒソと、金明妃を嘲笑^{あざわら}っているかのような態度すら見せていた。

(本当、腐ってる連中ばかりね。この子が妃だと知っているくせに、見て見ぬふりなもの。それに、どこか妃の不幸を楽しんでいるように見えるわ)

思っていた以上に、金明妃の立場は弱いようだ。権力や後ろ盾がまったくない妃のようで、家臣たちに馬鹿にされるのが当たり前になっているようだった。

「いい加減にしないか、貴様ら！ 相手は妃だぞ!? そのようなふるまい、許される
 とも思っているのか!?」

耐えかねた曹朱が怒鳴ると、彼らの笑顔は一瞬にして消えた。なかには、バツが悪
 そうに下を向いてしまう者もいた。

「……香麗然、何があったのか、金明妃から聞き出せないか？ 男の俺よりも女性で
 ある君の方が、心を開いてもらえと思う」

「ええ。そのつもりよ」

金明妃は泣き腫らした目を大きく見開き、涙ながらに言った。

「わ、わたしはただ、散歩をしていただけなの。でも、わたしに名字があることが気
 に入らないって……この方々が、突然……ひっく」

兵士、そしてどこかの妃つきの侍女たち。男女問わず、金明妃を妃とすら思ってい
 ないようだ。そんなあり得ない光景を目の前にして、香麗然から笑顔が消えていった。
 （本当、クズの集まりね。生まれや名字が何だって言うのよ!? そんなの、この子の
 意志でどうにかできた話じゃないでしょ？ それを寄ってたかって……）

最低としか言いようがない。香麗然はぐっと唇を噛み締めた。文句の一つでも言っ
 ておかなければ気が済まない。そう思い、後宮のクズたちに向き直って口を開きかけ
 た。そのとき……

「あんたも、金明をいじめるつもりなの!?」

金明妃と一緒にいた朱い侍女服の女性が、兵たちを言い負かして戻ってくる。ズカ
 ズカと、わざとらしい足音をたてながら、金明妃と香麗然の間に入った。

その侍女は、茶色の髪を頭のとっぺんで団子に結び、布を巻いている。口元のほく
 ろが大人びた印象を与え、にこりともしない表情のせいか、気の強そうな性格に見え
 た。年の頃は十五、六歳だろうか。細身ではあるけれど曹朱よりも少しだけ低い程度
 の長身のせいか、どこか男性的にも見える。

化粧をすれば、美しくなるだろうと思えるほど、顔立ちは整っていた。しかし笑顔
 ひとつ見せないため、せつかくの中性的で整った容姿の魅力が損なわれているように
 感じられた。

侍女はするどい目つきで睨みながら香麗然に詰め寄る。

「答えなさいよ！ あなたもいじめに参加するつもりなんでしょ!?」

「え？ そんなことしないわよ？ かわいそうじゃない」

売られた喧嘩は買う主義の香麗然は、火花を散らすように相手を睨み、拳を握り
 締める。「喧嘩は、買うもの！」そう言い放ち、あからさまに好戦的な態度を見せた。
 互いに火花を散らし、「ああん？」と眉をひくつかせる。香麗然は腕をまくり、しゃー
 と大声をあげた。

すると曹朱をはじめ、その場にいた兵たちが慌てて二人の間に割って入った。
「うがー！ 離しなさい！ こういうやづはね、拳でわがらせなげや理解しねえのよ！」

いつにも増して好戦的な香麗然だ。

曹朱ですらたじろぐその熱さに、喧嘩を売った侍女も引いている。

（絶対に、ソリが合わないわ）

第一印象から最悪だと心の中で毒づいたそのとき。

「……はあー。ごめんなさい。あたしが悪かったわ。あなたに八つ当たりしてしまった」

ふっと息を吐いて、女性が香麗然に謝罪する。拱手した後、顔を上げた。女性にしておくには勿体ないほどのかつこよさだ。それから真剣な面持ちで金明妃を見つめ、軽く頷く。

「申し遅れました。あたしは楊鈴、朱の妃の侍女を務めています」

先程までのぶつきらぼうさは消えていた。

楊鈴は香麗然と向き合い、ここで何が起きたのかを説明してくれた。

「あたしは金明妃様と昔からの知り合いなんです。身分は違えどこうして、友だち付き合いみたいな関係なんです」

侍女と妃。身分はあまりにも違う二人だけれど、どちらも嬉しそうに笑っている。

その様子は、彼女たちが気心の知れた仲であることを物語っていた。金明妃を馬鹿にしていた兵や女官たちは、いつの間にか口を挟むことをしなくなっていた。

「ここを通過して散歩することは、あたしたち二人の日課のようなものなのです」

楊鈴が微笑むと、金明妃もつられるように笑顔を浮かべた。だが、楊鈴はすぐにその笑みを消し、言葉が続ける。

「少し前、この池の鯉たちに餌をやっていた侍女が亡くなりました。そのことで金明妃様はずっと心を痛めていました。でも、最近になってようやくその心が癒え、ここに足を踏み入れることができるようになったのです」

亡くなった侍女との関係を、暗に示すような言い方だった。

香麗然は、それが挑戦状のようなものだとすぐに悟る。腕を組み、平静を装いながら挑発に乗ることにした。

（この楊鈴って人、表向きは謝ってるけど、本心は違う。さっきの説明も、金明妃との関係を示せ！ って言ってるようなものよね）

浅はかと言えはそうなのだろう。けれど売られた喧嘩は是が非でも買う香麗然だ。何がなんでも解決してやる、と内心で息巻いた。ただ、売り言葉に買い言葉だけは避けるべきだと思い直し、ひとまず静かに楊鈴の話聞くことにした。

「日課は、散歩と鯉の餌やりです。それ以外は特にどうというものはございません」
楊鈴の視線は鋭く、しかもどこか挑発的だった。

香麗然是黙って頷く。

（やっぱり、私に何かを解けて言ってるようにしか思えないわね）

こほんっと、軽く咳払いをし、金明妃へ向き直った。

その一方で、曹朱は急いで兵たちと話をしている。

「理由はだいたい理解したわ。だけど、だからといって兵や女官たちが妃を罵（ののし）っていいわけじゃないわよね？」

楊鈴からの挑発はひとまず脇に置き、香麗然はその場にいる人たちへと問いかける。すると、一部の兵や女官、侍女たちは、そそくさと逃げるように立ち去ってしまった。

それはあまりにも呆気ない幕引きだ。香麗然是肩透かしを食らった気分になった。

「……まあ、いいわ。私は妃ではないし、侍女でもない。口を挟むことはできないと思うのよね」

そう言って、香麗然は一人でうんうんと納得した。

「それでは金明妃様、私たちはここで失礼いたします」

軽く拱手し、曹朱の手を取ってこの場から離れた。

第四章 毒

侍女試験の合格発表当日、香麗然是緊張しながら実家から持ってきた衣に着替えていた。香麗然にとって、これは賭けのようなもの。負ければ即、実家に帰ると決めている。そのことを胸に、両頬を軽く叩いて気合いを入れた。

「よし！ 行きますか……あっ」

意気込んだ瞬間、お腹が大きく鳴る。香麗然是お腹を擦り、恥ずかしそうに笑った。『あらあら。どんなに緊張しても、お腹は減るものよねー？』

いつの間にか香麗然の頭の上に乗っていたやきとりは、ふわふわな羽を広げる。そしてゲラゲラと大笑いしながら、香麗然の怒りの声をくぐり抜けるように、空へと飛び立った。

「まったくもう！」

お喋りな鳥だ。香麗然是やきとりが飛び去った空を眺め、部屋を出ていく。

着いた場所は食堂だ。そこは朝食にありつこうとする兵士や宦官、そして侍女たち

で埋め尽くされている。当然席など空いてない。

香麗然是朝ごはんが乗ったお盆を持ちながらキョロキョロと周囲を見渡す。ふと、食堂の隅に、見知った人物を発見した。

（あ、あの後ろ姿、曹朱だ）

どうやら彼は一人で食事をとっているようだ。艶のある長い黒髪が、尻尾のように揺れていた。

香麗然是意気揚々と曹朱のもとに向かう。そして声をかけ、隣に座った。

「えへ。昨日ぶりね」

「座っていいなどと、言った覚えはないぞ？」

「まあまあ。そんな固いこと言いつこなしよ」

「……ん？ 珍しい服だな？」

「ああ、これ？ うん。勝負着なんだ。ほら、今日が侍女試験の結果発表の日でしょ？ だから合格しますようにって、願掛けのために」

ゆつたりとした重ね着の衣装は後宮の中では浮くのだろう。その場にいる誰もが彼女を見ていた。けれど香麗然是視線そのものに慣れた様子で、平然としている。

「……そうか」

曹朱は一言だけ返し、箸を置いた。彼の食器の中身はほとんど空だ。けれど一つだ

け、小鉢には中身が残っていた。

「あれ？ それ、食べないの？」

「うっ！ お、俺はどうしても、これだけは無理なんだ」

曹朱が残していたのは海老の豆板醬漬け、そして芹のおひたし。まだ箸をつけていないから食えず、それを香麗然のお盆に載せた。

香麗然是遠慮なくそれを食べようとする。箸を伸ばしたそのとき、ふと、ある違和感に気づいた。

「……んん？ あれー？」

皿を手にとり、おひたしを犬のようにクンクン嗅ぐ。

（……やっぱりだわ。この匂いって）

隣にいる曹朱に質問しようとした瞬間、食堂の扉が勢いよく開けられ、数名の兵が現れた。そのまま、かなり慌てた様子で厨房へと走って行った。

「……？」

曹朱が怪訝な顔をして片眉を上げたとき、今度は食堂内で悲鳴があがる。食事をしていた者たちが苦しみながら次々と倒れていった。白目をむいている人、痙攣している者もいる。

二人は顔を見合わせ、倒れた人たちのもとへと駆けよった。彼らには同じ症状が現

れており、そのまま動かなくなる者もいた。

「……いったいこれは、どういうことだ!？」

「……っ曹朱様、実は……」

食堂の中に慌てて入ってきた兵の一人が彼に話しかける。

その内容に、香麗然たちは耳を疑った。

妃が食べるものは先に毒見役が食すことになっている。そして今回はその毒見役の一人が亡くなったとのことだ。さらに不可解なことに、毒見役ではない兵や侍女たち、つまり妃に出されたものとは別の料理を食べた者たちも痙攣などの同じ症状に見舞われているらしかった。

いったいこの後宮内で何が起きているのか。

二人は、ただ驚くことしかできなかった。

この状態で食事を続けるわけにはいかない。そう判断した曹朱は、厨房の中に入っていた兵たちを呼び戻した。そして苦しんでいる者たちを急いで医療棟へと運び、兵たちを食堂に集める。

「——いったい、何がどうなっている?」

曹朱は椅子に座り、ぶつきらばうに足を組んだ。鍛え上げられた肉体を持つ兵たちが怯えるほどの眼光を放ち、目を細める。

「初めから説明しろ」

「は、はい!」

兵たちは拱手した。そして、すべての出来事を振り返っていったが、始まりは誰にもわからなかった。食堂に駆けこんだ兵たちですら、それは知らないと言う。

「いつものように金明妃へ朝食を持って行きました。そして毒見役が最初に食べたのですが……」

「……この食堂で倒れた者たちと、同じような症状が現れた。そういうことか?」

「は、はい! それで我々は、食堂の調理に原因があるのではない、ここへ来たのですが……」

その途中、廊下で倒れている女官数人を発見。また違う兵は、少し離れた場所で宦官が倒れていると報告をしてきた。他にも食堂へ来る途中でいくつもの同様の症状が報告される。食堂へ着いた頃には、報告はすでに十件以上にもなっていた。

「妃の毒見役だけかと思っていました。どうやらそれ以外にも被害者がいたようにして。ここまで被害が拡大していると、やはり厨房に何かあったのだと思っただけです」

「なるほどな。それで有無を言わず、厨房へ駆けこんできたわけか」

いつの時代も、妃を殺そうと毒を食事に混ぜる事件は起きている。今に始まったこ

とではないため、普段なら、ここまでの騒ぎにはならない。けれど今回はそうではなかった。妃以外の者も犠牲になったのだ。しかも一人や二人ではない。隠し通すことなど到底不可能な数だ。

民に知れ渡るのも時間の問題だ。

「そうなる前に何としても、解決する必要があるな」

曹朱は奥歯を噛み締めて立ち上がり、兵たちに早急に解決せよと命じた。

兵たちは拱手する。

食堂と被害者の二手に分かれて調査を始めた。

香麗然は曹朱をその場に置いて、厨房へと入る。そしてある物を見つけ、厨房の奥から曹朱に向かって手をふった。

「ねーねー。曹朱、ちょっと面白いもの見つけたんだけど？」

曹朱を呼ぶ香麗然の手には一枚のお皿が載っていた。

「……君は、何をしているんだ？」

「まあまあ。それよりも、すごい物を発見したわよ」

香麗然は皿を持ったまま曹朱の隣に座った。皿の上には朝食のおかずに使われた葉っぱが載っている。それを一摘みして、犬のようにクンクンと匂いを嗅いだ。

「うん。やっぱりだわ」

「……？」

訳が分からず、曹朱が数名の兵とともに首を傾げていると、香麗然は葉っぱの載った皿を箸でつつく。

「いや……香麗然、これは？　というか、なぜこれを持ってきた？」

「朝食のおかずの一つよ」

「……いや。それはわかるが……なぜ、これを？」

「え？　だって今回の事件、原因はこれだもの」

あっけらかんと言う。

曹朱からすれば寝耳に水なのだろう。はっ？　と、すつとんきような声で聞き返した。

「いや、ちょっと待ってくれ。どういう意味だ？」

「うーん。どうもこうも……この葉っぱが毒草だからよ。それ以外、言いようがないわね」

食堂は一気にざわつく。静かな食堂内に香麗然の声が響いた。それは厨房にいた兵や、料理人たちのもとまで届いた。彼らは何だ何だと香麗然のところまでやってきた。香麗然は大勢の人に囲まれても、なおも自由奔放な姿勢を崩さない。というよりは、彼らのことなど眼中にないようだ。ただ一点、彼女が毒草と言いはる葉っぱを見つめ